

私は、4年制過程から6年制過程に移行した1期生です。もともと実験が好きな私は、薬剤師の職につくというよりも、薬の研究をするということを主に考えて薬学部の道を選択しました。実際、入学すると研究者を育成するというよりも薬剤師を養成する面が強いという印象を受けました。それは、いい意味で私にとって刺激になり、常に臨床のことを考えて研究をすることが、6年制過程を卒業した研究者に意味をもたせることができると思いました。その思いを胸に大学院進学を決意し、学部の頃から指導していただいている山本恵子教授のもとで研究を続けていこうと決めました。

私の研究テーマは「ビタミンD」です。ビタミンDの中でも、活性型ビタミンD3は、我々の生体内で血中カルシウム濃度の恒常性維持に必要な不可欠なホルモンです。さらに、免疫調節作用や、細胞の分化誘導や増殖抑制作用も発現することが知られています。このように、魅力的な生理作用をもつことから創薬研究が盛んに行われています。実際、臨床応用されている医薬品もあり、ビタミンDの創薬研究は、臨床にとって重要な位置づけであり、私にとってやりがいのあるテーマでした。

研究を進めていくと、成功よりも失敗のほうが多く、壁を越えたらすぐにまた大きな壁にぶち当たるというような試練の連続であったと思います。今、思い出すことは実験の失敗ではなく、成功した時の大きな喜びや、論文が学術雑誌に掲載された時の感動など良い思い出ばかりです。これは、いつも熱心に指導して下さった山本恵子教授をはじめとした研究室の先生方やディスカッションに付き合ってくれた同期、後輩のおかげだと思います。

これから私は日本を離れ、アメリカに留学します。研究テーマは変わりますが、研究する志は変わりません。それは、常に臨床を意識した人の役に立つ研究を行うということです。この志こそが6年制薬学教育を受けた者が薬学研究を遂行するのに重要なことだと思います。昭和薬科大学で学んだ10年間を活かし、人の役に立つ、多くの人に貢献する研究者になりたいと思います。

最後に、在学生の皆さんには、薬学教育と薬学研究を変えるのは先生ではないということをお伝えしたいと思います。これからの薬学の中心は6年制過程を経験した人材だと思います。次世代の日本を担うのは、私たちです。より良い日本を目指して共に頑張りましょう。